love & weight

うすしお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｌｏｖｅ　&ａｍｐ；　ｗｅｉｇｈｔ

【Ｎコード】
Ｎ７４０６Ｏ

【作者名】
うすしお

【あらすじ】
別腹、というものがこの世には確実に存在します。そしてその存在を多くの人が認めているにもかかわらず、実際に現物の器官を見た人はいません。それではいったいどこにあるんでしょう？

彼女が体重の話を始めた。今年に入ってから、もう5回目になるダイエット宣言だ。生まれてから数えたとすると、確か27回目になるはず。

「28回目よ」

――失礼。

とにかくそのせいで、目の前のテーブルはサラダに豆腐にこんにゃくにと、ヘルシーで低カロリーな料理ばかりが並んでいる。これじゃ精進料理だ。彼女に注文を任せたのがまずかったようだ。

店員が二種類目のサラダを運んできたときに、とうとうぼくはたまらずに言った。

「肉料理は？」

「却下よ」

彼女は即答した。ぼくはムッとした。

「なんで？」

「あなたは自分の彼女がブヨンブヨンでもいいの？　わたしはいいプロポーションでいたいの。あなただってその方がいいに決まってる」

「いやだからそうじゃなくて。こっちにはダイエットの必要もないし、仏門に入るつもりもないんだけど？」

「協力してくれたっていいじゃない。わたしってどうも意志が弱いみたいで、誰かが目の前でバカみたいにガツガツ食べてるのを見せられたら、どうにも我慢が。――だからほら、ここは愛する彼女のために一肌脱いでみようよ」

「それなら愛する彼氏のために、ぶ厚くて脂汁したたるのを食べさせてあげようって思ってくれない？」

「もう！　いったい私とお肉とどっちが大事なの！」

彼女のその言葉はあまりにも滑稽すぎる。ぼくは吹き出した。より

によって食材と自分とを較べるなんて。

仕事と私と、だとか、友人と私と、だとか、彼女はいつも何かと何かを較べては、どちらかをぼくに選ばせようとする。けれどもいったいそれが何になるって言うのだろう。こうやって彼女と過ごし、また過ごしてきた時間の積み重ねこそ、選択してきた結果のあらわれに他ならないって言える。もし肉をおあずけされていても、ぼくがこの場を、彼女のそばを離れることなんてないっていうのに。まるで忠犬みたいに。

たとえば愛（ラブ）と体重（ウェイト）と。こんな選択肢ならどうだろう。相関しそうで相関しなさそうで。ぼくの心に占める彼女の比重（ウェイト）ならあるいは。

「ああもう。とにかく、今日は肉抜きよ。わかった？」

彼女はすねるように言った。ぼくがいきなり吹き出したりなんかしたからだ。不機嫌そうな彼女の顔を見てぼくは笑った。

「何よ」　口をとがらせて、彼女がこちらを見ている。『怒った顔も――』　そんなセリフを思い浮かべながら、ぼくは言った。

「――分かったから、今夜はここで引き分け、そういうことにしておこう。な？　野菜だって何だって食べるよ。文句だって言わない」

そして言葉どおりにぼくは食べた。彼女の分まで奪い取る勢いで。

それからはいつもと同じに戻った。仕事の話、映画の話、家族や友達の話。本当にいつもどおりに。

ひととおり食べ終えると、彼女は再び店員を呼んだ。どうするのかと見ていると、彼女はメニューから2、3個のデザートを注文し始めた。ぼくは一瞬面食らって、けれどもさすがに声を上げた。

「ちょっと待て。ダイエットするんじゃなかったのか？」

「うん？　――ああ、ちょうどこの辺にあるのよ、別腹って」

そう言いながら彼女は盲腸の少し上あたりを指差した。ぼくに怒りがこみ上げてきた。椅子から立ち上がり、声を荒げて言った。

「いいから待て。そんな自分勝手があるか。あってたまるか！」

ぼくのその強い口調で、彼女の口がみるみるへの字になっていくのが見えた。でもぼくの方だって止めたくはないし、もう止まりそうにもない。

「しかもなんだ、さっきの言い方は。しれっと別腹だなんて。だいたいお前はいつもいつもワガママで、いい加減振り回されるこっちの身にもなれって――」

そこまで言ったとき、彼女はすっと立ち上がって、

「うるさい」

という一言といっしょにして、ぼくの腹へとパンチを入れてきた。強い衝撃がみぞおちから全身に拡がる。ぼくの口からは赤いトマトが顔を出していた。

彼女の的確な踏込みで、その体重（ウェイト）をたっぷり乗せた、強烈無比なボディーブロー。床に膝を落としながら思った。どうやらぼくは本格的に彼女のダイエットに協力しなければならないようだ。

（後書き）

男と女とでは恋愛関係の認識に少々の違いがあるようで、「確かめなくても分かるでしょ？」ってのが男性なら、「ちゃんと確認しないとダメ」ってのが女性ではないかと。

何にしても物事はほどほどに。ボディへのパンチは非常に辛いダメージを与えるそうなので、よく注意してから使いましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7406o/

love & weight

2010年11月6日08時31分発行